道標

本の栞なんて、自分には無関係なものだと思っていた。なぜなら私は、本を読むとなると一気に読むタイプで、しかも読むのが速い。もちろん、スピンが付属されている本だと使うこともあるが、大抵はどこまで読んだかは場面で覚えているし、忘れるほどまで読むのを放置することはない。書店でもらう栞も使わずにそのまま捨ててしまうことが多かったぐらいだ。お土産にとステンレス製の栞をもらって試しに本の上に載せてみても、こんな大層なもの使うことないしなと放置していたぐらいだった。そもそも、薄い紙にあまりにも無骨なそれが似合わないからと、使うとしてもプラスチックのブックマーカーを使用していた。

それがどれだけ贅沢なことだったのかと、今の私は知っている。なぜなら、今の私は本

を読む時間がないからだ。

子どもが産まれたと同時に私が失ったものが多くある。その一つが本を読む時間だった。

妊娠中、胎動が強すぎて夜眠れずにいる時には、スマホではなく、よく本を読んで明け方を待っていた。中学生の時にはやった少女小説を読んでいると、なんだか昔に戻ったような気持ちがして、この時間も悪くないなと思ったりもした。妊娠中はたくさん本を読んだかもしれない。それこそ栞なしで。

母には、子どもが産まれたら本を読む時間がなくなると言われてはいたが、まさかここまでなくなるとは思わなかった。気が付けば、本に触れないで一週間などざらにあった。当然、本を読まなければ栞すら必要なかった。

はっきり言って絶望した。こんなはずではなかったと思いながらも、授乳中、子どもをあやしている間に活字をどうしても拾いたかった。だから少し離れた先に、新聞や手で押さえなくても読むことができる雑誌を開いて活字を摂取した。それでなんとか精神を安定させていた。

けれども、私は本が読みたかった。

だからこそ、お手洗いに行っている間に文庫本を開いた。久しぶりの本の重みに涙が出るほど嬉しくて、お手洗いは終わっているのに貪るように文字を追った。

夢中だった。幸せだった。ずっとこのまま浸っていたい。

そう思った矢先、外で泣いている子どもの声が聞こえた。

本を閉じかけて絶望した。ただ、書店でも

らった栞が顔を覗かせているのに気づき、私は咄嗟にそれを引き抜き、読んでいた場所に置いた。ほんの少しだけ心が落ち着いた。

大丈夫。ここで待っているよ。次に読む時までちゃんといるから。

そう言ってもらえたような気がして、私は文庫本を閉じた。

次にその文庫本を開いたのは、二日後の子どもを寝かしつけた後の時間だった。

本当はずっと読みたい。けれども、きっとこれを一気に読んでしまうと寝る時間がなくなってしまう。妊娠中みたいに、日中に自分の時間で寝ることなんて許されない。子どものお世話があるのだから。

泣きたくなる気持ちを抑えきれずに、泣いた。自分が全く知らない世界に迷い込んで、悪い夢でも見ているんじゃないかと思った。

子どもの寝言に顔を上げて、手元にある文庫本に挟んでいた栞に目を落とした。

大丈夫。ちゃんとここで待ってるから。いつでも戻ってこられるよ。安心して。

こんな薄い存在の栞に、ここまで助けられるとは思いもしなかった。涙で視界が歪む中、私はそっと栞に触れた。

今度一人時間をもらったら、栞をたくさん買いに行こう。それがあれば、私はまた、たくさんの本の中で待ってもらえるから。

前の私は、一気に読んで活字を体内に取り込んでいたけれども、今は栞を道標にして、少しずつ活字を体の中に積み上げている。

それを思うと哀しくもなるけれども、いつかまたの時まで、栞にはたくさんお世話になって救われるのだろう。